

はじめに

胃がんに対する化学療法は、1980年代後半にシスプラチンが使用可能となって以来急速な進歩が認められ、素晴らしい効果を経験すると同時に、腎毒性や強い催吐性に対する管理も必要とされるようになりました。さらに、1999年にS-1（テガフル・ギメラシル・オテラシルカリウム配合剤）が承認されてからは、経口抗がん剤と注射薬の組み合わせが主流となり、現在も使用されている標準治療の確立に至りました。

その後も次々と新しい薬が登場し、今や胃がんに対する化学療法は、二次治療にとどまらず、三次治療までもが当たり前に行われるようになりました。また、支持療法の進歩にも著しいものがあり、今ではシスプラチンを投与しても強い嘔吐に悩まされる患者さんはほとんどみられなくなりました。こうした化学療法や支持療法の進歩により、化学療法を行う場所も病棟から外来に大きくシフトしています。

外来で化学療法を行うには、化学療法室の整備だけではなく、医師、看護師、薬剤師、ソーシャルワーカーなど、多職種の緊密な連携が今まで以上に重要となります。また、在宅における有害事象への対応などに関しては、患者教育だけでなく、かかりつけ医や調剤薬局、場合によっては訪問看護ステーションなどとの連携も必要とされます。それと同時に、緊急時に対応できるよう、病院側の体制も整備しなければなりません。このように、外来化学療法を円滑・安全に行うには、患者さんを中心として、多職種・多施設の連携による支援が必須となります。

本書では、胃がん外来化学療法の実施にあたり必要とされる事項を網羅的に解説しました。化学療法を専門としていない医師や医療スタッフでも理解できるよう、なるべく具体的かつ分かりやすく執筆していただきました。特にレジメンごとの解説では、実際の治療に際して必要な情報が簡潔に記載されているので、ベッドサイドでハンドブック的に使用していただけるものと考えています。また、代替医療に関しては、医療者側はむしろ情報が不足しているのが、貴重な情報源となるものと思われます。

本書が、胃がん外来化学療法を導入する医療機関において安全で円滑な運用の一助となり、一人でも多くの患者さんのお役に立てることを期待しています。

2015年12月

寺島 雅典